

板垣貴志著 『牛と農村の近代史——家畜預託慣行の研究——』

野間万里子

本書は島根県旧飯石郡鍋山村在の新興の牛持、板垣家に残された文書群を中心史料として牛持の経営実態と地域社会で果たした役割とを説明する一冊である。牛持とは牛の大規模所有者であり、自家所有牛を役牛として貸し出し、また子牛生産用の母牛として預託する牛の生産・育成・供給の元締めともいえる存在であった。農業史研究では家畜の役利用に焦点を当てた研究蓄積が存在するが、役畜が地域社会の中でどのように生産・育成・供給されていたのかという点についてはほとんど研究がなされてこなかった。

その理由の一つとして、「水田稲作史観」とでもいおうか、牛馬はあくまでも農業生産の手段であり、生産力向上

にいかん貢献したかという点に関心が集中していたことが指摘できる。具体的には牛馬耕の普及が家畜に関する農業史の中心的テーマであった。しかし牛馬は古くから生産と使役が地域的に分化しており、本書で見られるような生産地帯（＝山間部および島嶼部等水田稲作不適地帯）では家畜の生産と流通が地域社会の重要な要素であった。また、ここで生産された牛馬が使役地帯に送られ農業生産を支えていたことを考えるならば、農業史、畜産史ならびに地方史にたいする本書の貢献は非常に大きい。

二つ目の理由として、家畜に関わる諸活動が史料として残りにくい点が挙げられよう。著者は親戚家の蔵から文書

を発見、さらに家屋解体の際に茶算筒や裁縫箱などからも文書類が発見された。土地関連、金融関連、村議会や寺社に関わる文書など小片史料を含めると五千点にもものぼる中から、牛関連資料を整理し分析を行った。板垣家四代目の栄之助が牛馬商免許を取得した一八八七年から五代目秀吉が死去する一九四六年まで、牛経営の全期間にわたる帳簿が残されており、家畜預託慣行の実証分析が可能となった。とはいえ、残された史料は「備忘録程度の認識で粗雑に記される箇所も多く、定期的に収支決算しているわけでもない」(三七頁) ようなものだという。しかもこうした史料を利用した類似研究はない。経済史研究、農業史研究における家畜の位置づけの弱さ、史料上の制約を考えると、「牛で歴史研究ができるのか、長い間悩み続けてきた」というあとがき冒頭の言葉がリアルである。

本書で扱う家畜預託慣行には次の二種が含まれる。まず一つ目は、「預け牛」と呼ばれる子牛生産を目的とした牝成牛の預託慣行である。預託先農家を厩先と呼ぶが、牛持と厩先の関係は本書の重要な論点となっている。そして二つ目が「鞍下牛」と呼ばれる使役を目的とする牡成牛の貸借関係である。子牛生産については畜産学(育種学)、役

利用に関しては農業経済学と、従来の研究では別個に取り扱われてきた両者を合わせて家畜預託慣行として分析する点は、牛持という存在に焦点を定めた本書のオリジナリティといえよう。

分析視角として(一)家畜を富としてみる視角、(二)家畜品種改良の視角、(三)地域社会の視角、を掲げる本書の構成は次のとおりである。

はしがき

序 章 課題と視角

第一章 家畜小作概念の再検討

第二章 牛生産地域における家畜所有の歴史的展開

第三章 中国山地における蔓牛造成の社会経済的要因

第四章 中国山地における役牛の売買流通過程と牛馬商

第五章 鞍下牛慣行による役牛の循環と地域社会

第六章 中国山地の預け牛関係にみる信頼・保険・金融

終 章 家畜預託慣行の盛衰と近代日本農村

附 論 板垣家文書の史料群構造

聞き書きノート

第一章では、昭和恐慌時に農家の苦境を打開するため打ち出された有畜農業奨励策以降、牛馬耕が動力耕耘機に取って代わられる一九六〇年代までの期間に活発化した「家畜小作」研究を整理し、批判している。「家畜小作」研究は主に農業経済学者によってなされたが、農村近代化をいかにして進めるかという彼らの目的意識が家畜預託慣行を前近代的なもの、半封建的なものとして否定的に評価することにつながったと指摘する。

そもそも家畜預託慣行には、子畜生産を目的とする以外に、労働力としての牛馬の賃貸借や共有、単なる飼育の委託といったものもあり、地域によりその呼称もさまざまであった。「家畜小作」研究の代表的な論者である宮坂悟朗は、そうした多様な家畜預託慣行の中から、家畜所有者と家畜飼養者との間に金銭的利益（子畜の売却代金、育成・肥育による評価額の上昇分）分配を生じるものを「家畜小作」と定義した。もとは土地小作にともなう農作業補助・生産力増進を目的とする家畜の貸与からスタートした地主的関係が、商業的畜産が進展するにつれて土地小作から分離、資本に従属する商人的関係へと展開したと考えている。このように宮坂らは家畜小作と土地小作との間に強い類比を

見ており、畜主と飼養者との関係は「果実の分配」をめぐる対立的だと考えているが、これに対し小野茂樹は牛の購入資金を持たない農家が牛を飼養できる点に注目し、零細農にとって福祉的慣行であったと評価した。序章で提示された著者の視角は、小野の評価を発展的に継承するものであるといえよう。

第二章では、板垣家文書の中の牛経営に関する史料を整理し、そこから板垣家の牛経営の時期区分、牛所有の変遷を導き出している（板垣家文書発掘の経緯、取納状況、史料群構造については、附論にまとめられている）。板垣家が牛経営を始めた当初は一冊の帳簿であったのが、最終的には（一）鞍下牛関係帳簿、（二）牛売買関係帳簿、（三）牛台帳、（四）周旋関係帳簿の四種へと分化していく。帳簿の付け方と収益方法とは密接に関係すると考えた著者は、板垣家の牛経営の展開を次のように時期区分する。

一八八〇年代のデフレを背景に板垣家が牛馬商免許を取得、牛経営に乗り出す。それ以前より板垣家は多少の貸金を行っていたが、貸付金回収のため債務者の牛の所有権を板垣家に移し、飼養はそのまま債務者が行う形で、預け牛関係に入ることがデフレの影響で頻発、こうして集中した

牛の売買を自ら行うため一八八七年、牛馬商免許を取得した（形成期・一八八七～一九〇五年）。一九〇〇年代後半～一九一〇年代には、中国山地奥部の厩先を確保することで優良牛を自前で生産・育成するシステムを構築した（転換期・一九〇六～一三年）。この時期に帳簿は（一）鞍下牛関係帳簿と（二）牛売買関係帳簿の二冊に分化する。安定期（一九一四～三五年）になるとこれに牝牡別の（三）牛台帳が加わる。牛台帳からは優良牛育成を目指す血統志向が読み取れると指摘している。一九三六年に（四）周旋関係帳簿が加わるが、これは預け牛関係の解消、所有規模の縮小と関連する（衰退期・一九三六～四七年）。背景には、「有畜農業奨励規則」（一九三三年）や軍馬徴発に伴う役牛による役馬の置換、皮革・食肉に対する軍需の伸長といった要因により牛価格が高騰、中国山地における子牛生産が高度化していったことがあげられている。

記帳様式の変遷から見事に牛経営の歴史的展開を導いており、非常に興味深い分析となっている。形成期と衰退期については、デフレや農業恐慌・戦時体制といった社会経済状況との関連からの説明もされているが、転換期、安定期に関しては板垣家に特有の時期区分と考えられるのか、

それともより広く全国的あるいは地域的傾向として考えられるのだろうか、少し説明が欲しいところである。

第三章では家畜改良の視角から、板垣家文書を分析する。厩先圏という空間的・位置的な分析概念を置くことで、役牛の育成システムの実態とその社会経済的要因を解明しようとしている。中国山地の中でも島根県仁多郡、鳥取県日野郡、広島県比婆郡、岡山県阿哲郡を中心とする山地奥部一帯が子牛生産の中核地帯であり、江戸時代後期には独自の選抜により蔓牛と呼ばれる一種の血統牛生産が行われるようになっていた。板垣家が位置する島根県飯石郡鍋山村はこの中核地帯の外（山地中腹部）に位置するため、山地奥部に厩先を持つことが重要であった。牛台帳や牛売買関係帳簿の分析から、板垣家では、自村内で生まれた子牛を自家所有にする割合は一割強であったのに対し、山地奥部厩先で生まれた子牛はその半数以上を自家所有にしていたことが明らかにされている。また、山地奥部以外で生まれた若齢牛を購入した場合も、購入後山地奥部へ預託し育成しようとしていたことも明らかになった。預け牛という形で山地奥部に集中的に資本投下していたことが実証されている。

山地奥部が優良牛生産地であったことは蔓牛造成の歴史から明らかであるが、優良牛とはいったいどのような牛なのだろうか。著者は鞍下牛貸出先農家や取引のある牛馬商からの書簡を分析し、頑健であること、温順であること、体格が大きすぎないものといった資質を抽出している。これらの資質は放牧によつて育まれる部分が大きく、したがつて放牧適地に恵まれた山地奥部が優良牛産地となるのである。この事自体は目新しい発見ではないものの、書簡から、また巻末の聞き書きノートから、一頭一頭個性を持った牛の姿や優良牛を希求する人びとの思いが鮮やかに伝わってくる。また、山地奥部の地理的・植生的条件だけでなく牛購入資本の調達が品種改良の要件であつたとする著者の指摘は、家畜を富としてみる本書の視角から生まれるものであり、預け牛の金融装置としての側面は第六章でさらに掘り下げられている。

残念ながら、著者が「経験的叡智の結晶」と高く評価する優良牛生産の具体的方法・方針は、板垣家文書からは知ることができない。板垣家の重要な厩先が位置する島根県仁多郡では一九〇〇年代にシンメンタール種による改良方針を定め、一九一六年以降はこれを廃止、和種およびデボ

ン系改良和種による牛種改良を行つていく⁽¹⁾。さらに一九一九年に島根県標準体型を作成、一九二一年より登録を開始する⁽²⁾。こうした牛種改良方針の策定により、厩先の子牛生産はどのように変化したのか、あるいは変化しなかったのか。またこれらの改良方針は厩先や鞍下牛使役農家の望む優良牛と重なるものだったのだろうか。一つの手がかりが牛価格の個体差の変化であろう。標準体型に則る牛が厩先や使役農家の求める牛であれば、登録牛が他の牛に比べ高値を付けることになる。改良の結果牛が均一化していけば、今度は逆に、価格の個体差は小さくなっていくだろう。本書一四二〜一四五頁に示された「表22 牛の平均価格と個体差」を見る限り、牛価格の個体差の経年的な変化は確認できない。山地奥部の牛だけで検討するとまた違った結果が見えてくるのだろうか。あるいは、「備忘録程度」であり全取引が記載されているわけではないため、この点に關しては板垣家文書から結論を引き出すことはできないのかもしれない。

続く第四章では、牛馬商の階層構造が地域社会に遍く牛（購入資金）を行き渡らせたこと、常連間での取引はモラルハザードを抑制する働きがあつたこと、を明らかにして

いる。農家経済にたいして牛購入価格は高価でありかつ品質にばらつきがある。そこで農家は、牛の性別・年齢・用途により専門化した牛馬商の目利きを頼り常連となることで、要望に沿った牛を適当な時期に周旋してもらおう。大規模に牛を所有する牛持が、広範囲に存在する個々の農家の希望に迅速に応えることは難しい。間に小バクロウの活動領域が生まれる。したがって牛持は所有牛がどこに預託されたのかを知らない場合もある。牛馬商の階層構造はしばしば小バクロウの牛持への従属として理解されてきたが、著者は、継続的な取引関係により信頼関係を築いた他、小バクロウの目利き違いによる損失時に牛持が援助するなど、家畜取引の危険軽減・分散機能を果たしていたと指摘する。第五章では鞍下牛の地域内循環の実態を明らかにし、牛持による鞍下牛貸出の慈悲的・相互扶助的側面を強調する。先に預け牛と鞍下牛とを合わせて分析した点に本書のオリジナリティがあると述べたが、その意義は本章の分析に明らかである。

板垣家では、まず三〜六月上旬に、田植時期の早い飯石郡山地奥部・仁多郡・広島県比婆郡に鞍下牛を貸し出す(一番鞍)。その後田植時期の遅い簸川郡神戸川下流域に貸

し出し(二番鞍)、七月上旬から九月下旬まで、飼料の豊富な山地奥部に飼育を委託(夏鞍・草負牛・草刈牛)、秋冬は再び平野部に飼育を委託(冬飼)していた。興味深いことは、中核的牛生産地である山地奥部へ貸し出している点である。牛飼養農家が多い山地奥部ではあるが、耕土が深いこと、牛生産に特化していたことから、自家飼養牝牛を使役に供さずにわざわざ鞍下牛を借りていたのである。山地奥部で生まれた牝牛は生産に特化し優良牛を生む。牝牛は、鞍下牛として地域内を循環し農業生産に役立つとともに、山地奥部が子牛生産に特化することを可能にする。預け牛と鞍下牛の有機的連関が存在したのである。鞍下牛収入(基本的に米納)は、牛購入費、飼養管理にかかる労力を考えると、「投資に対する収益として見合うものではない」(一一九〜一二〇頁)ため、大規模に牛を所有し地域社会に役牛を循環させることは、「牛持が地域社会から要望された大きな社会的役割」だったと結論している。だが戦間期以降、現物米による鞍下牛収入の激減(農村への貨幣経済の浸透)と、鞍下米の高い広島県比婆郡への貸出割合の増加(地域社会内における慈悲的慣行から利益追求的経営への転換)という変化を迎える。

第六章では牛持と厩先の経済的關係から、預け牛が地域社会で果たしていた役割を検証している。預け牛關係は「足一本」なら生産仔牛価格の四分の一が厩先、四分の三が牛持の取り分、「足二本」なら折半というような分益契約にすることで、牛価格の変動や個体差、死亡といったリスクを分散していた。これを著者は預け牛關係の保険機能とする。

板垣家文書からは、利益分配率が厩先四分の一、牛持四分の三であったのが日露戦後ごろから徐々に厩先への分配率が上がっていき、一九二〇年代には二分の一に固定化し、ことが分かる。著者はさらに、厩先を山地奥部、周辺村、周辺村の中でも血縁關係のある厩先に分けて分析する。血縁關係にある厩先との取引は当主が代変わりしても長期的に取引關係を結ぶケースが多く、利益分配率が二分の一になるのが一九一〇年前後とやや早い。板垣家が親戚家である厩先に資金融資をしていた史料が残されているが、無利息で貸しておりしかも牛代を以って返済している。また、別の親戚家では、利益分配率をめぐり、二分の一では「甚だ困難」であるため、七割の分配を求めめる書簡を板垣家に送っている（一九二四年）。これら史料から、血縁關係のあ

る厩先の、牛持である板垣家に対する従属性が希薄であったと著者は指摘する。

周辺村の厩先は数の上では最も多く六九名にのぼる。小作帳簿や不在村地主の差配帳簿と照合した結果、そのうち七割以上が土地小作をとまわらない預け牛關係であることが判明している。分配率の上昇時期は、土地小作の有無ではなく個別的關係が影響していたと推察している。この事實は、第一章での宮坂批判の重要な根拠の一つである。一九一五年から三八年までの間に計一七件の取引記録が残されている乗恒家は、板垣家の土地小作人でもあった。年貢米の不足その他乗恒家は板垣家にたいし負債を抱えていたが、これには親戚家と同じく利息をつけていない。牛代から返済しており、著者は、預け牛關係がインフォーマル金融として機能していたとする。

これは山地奥部の厩先との關係においても同様であった。山地奥部の厩先糸原家は、鞍下牛借用賃の滞納から板垣家に負債を抱えるようになっていた。この負債もやはり無利息であり、大半は子牛売却価格によって返済されている。板垣家は、糸原家生産子牛の二四頭のうち一八頭を自家所有に買い上げており、糸原家の優良牛生産能力を高く評価

していた。著者は厩先が金融面で牛持を頼りにしており、牛持は優良牛を生産する厩先を大事にしていたと、この関係を互恵的とみている。ただ、鞍下牛借用賃が厩先の経済を圧迫し負債を重ねる原因となっていた点は看過できない。著者は前章で、牛持にとって鞍下米収入は投資として見合うものではなかったと主張していたが、それすら厩先にとっては大きな負担だったのであれば鞍下牛慣行、ひいてはそれに支えられた山地奥部での優良牛生産の経済的意味を再考する必要があるように感じる。家畜改良学者であり中国山地における黒毛和種の固定をリードした羽部義孝によって、鞍下牛慣行が農家経営上の構造的矛盾として断罪された理由はここにあるのだから。もっとも本書に記された糸原家の事例は、板垣家への金融的依存が顕著であったから取り上げられたのであり、他の厩先の事例も提示することで、著者の主張が説得力を持つものかもしれない。

利益分配率に関しては、山地奥部では日露戦後という早い時期に二分の一の分配率が実現している。これは優良牛生産の中核地である山地奥部に厩先を確保するための戦略であり、分配率を上げ厩先のインセンティブを引き出すことが意図されていたと考えられるが、著者はそれだけにと

どまらず飼料構造の変化が背景にあると考えている。一般に繁殖牛は乳牛・肥育牛はもちろん役牛と比べても放牧期間が長く濃厚飼料給与率も低く、その飼養管理は粗放的であった。意識的に優良牛生産を行う山地奥部厩先では、繁殖牛としては早い時期に購入濃厚飼料の給与に踏み切ったのではないか、購入飼料割合が増えることで子牛生産にかかる費用が増加したため、利益分配率の上昇が必要だったのではないかと考えられるのである。この点に関しては、牛持の史料を中心としており厩先の実態までは不明であるため、実証としてやや弱いと感じる。今後のさらなる民間所在史料の発掘が必要であろう。また、産牛組合が飼料購入に関与していたことも考えられる。板垣家文書を出発点に外の史料との接点を探っていくことが今後の課題として挙げられる。

終章は、一八八七年から一九四六年までという板垣家の牛経営の歴史を、地域史と結ぶ作業となっている。たたら製鉄の衰退により鉄山師による家畜供給システムが崩れ、しかも一八八〇年代のデフレが家畜の流動性を高め、板垣家のような新興の中小規模の牛持が誕生したとする。こうして生まれた役牛の育成システムや地域循環は相互扶助的

機能を果たしており、「資本主義化の圧倒的な波力を緩衝する地域社会の防波堤」（一九六頁）と評価できるのである。しかし農村に貨幣経済が浸透した一九二〇年代、牛経営は営利的性格を強めていく。そして一九三〇年代には「畜産奨励規則」（一九三二年）に端的に表れるような商品的畜産と、家畜保険法（一九二九年）、農業動産信用法（一九三三年）といった二連の法整備により家畜預託慣行が担っていたインフォーマルな保険・金融機能が、フォーマルなものに置き換えられ、家畜預託慣行は衰退していったのである。

以上、本書の内容を紹介しながら、疑問点や今後の課題についても触れた。疑問点や今後の課題は史料上の制約によるところが多いが、研究史上の大きな空白地帯であった家畜生産・育成・供給について本書が具体像を提示してくれたからこそ、生まれた疑問であり課題である。家畜は主な課税の対象ではなく、また牛馬商は農業の傍ら兼ねられる場合も多いため、そもそも記録として残されることが少ない。私たちは、産牛組合や研究者により記録されたものから、牛飼養・取引の実態を部分的に知るばかりであった。板垣家文書のようなミクロな史料が貴重である所以である。

仮に板垣家文書のような史料があったところで、畜産史研究が低調であれば史料価値に気づかれず埋もれたままになることも考えられる。板垣家文書が著者によって発見され、牛持の実証研究として本書に結実したことは畜産史研究、中国山地の地方史研究にとってまことに幸運であった。ただ今後も同レベルの研究が増えていくと考えるのは樂觀的に過ぎよう。史料の制約と向き合いつつ、記述されていない事柄があることを常に考えつつ、研究を進めていくしかないのであるが、巻末に付された聞き書きノートはそのためのヒントのように思える。六名の牛経営関係者によるきわめて魅力的な語りが掲載されている。

証文なんかはないね。それでね、牛の商売は手を叩くことだけだね。領収書だいなんだいないだ。パチパチつと。（二二三頁）

牛の売買をして儲けたら田んぼを買い、山を買い、それを買わないと町へ顔が出されない。かなりないと村会議員にでも出られないというので、一生懸命で不動産を買ったんだそうですね。まずは牛から始めたんで

この二つの語りが、牛持の経営帳簿からは分らない、非常に重要な情報を含んでいることは明らかであろう。これらの語りが板垣家文書を読み解く大きな助けになったと想像できる。これまでは主に民俗学の領分とされてきた聞き書き、バクロウの世界を歴史学としてどう扱うか、本書はその一例でもあるのだ。

本書は全体にコンパクトにまとめられているが、板垣家文書にも聞き書きにも、本書には盛り込めなかつた部分、分析を深めきれなかつた部分がおそらく相当あるのではないだろうか。本書の次の展開を期待する。たとえば板垣家文書の世界と、外の世界の接合をより追及してほしい。板垣家の時期区分が独自のものなのか地域的広がりを持つものなのか終章で素描された議論をさらに深めることは可能ではないか、牛肉消費の拡大と深化は牛産地に具体的にどのような影響を与えたのか、等考えられることは多い。特に評者個人の関心に寄せていうならば、産牛地における科学的知識と経験的知識の接合も興味深い論点となるだろう。

評者は、滋賀県における牛肥育技術の展開過程に関する研究を行った際、滋賀県農会が肥育の先進地域であつた蒲生郡農家の肥育方法を記録し、科学的な飼料標準に照らし合わせ評価、さらにその結果をもとに県内他地域へ肥育指導を行うという肥育奨励策をとつた事例に接した³⁾。農会による技術普及を契機に、経験的知識がおそらく初めて記録(数量化・文書化)され科学的知識と接合することになつたと考えられる。中国山地における優良牛生産に関する経験的知識に関しても、家畜改良学研究者の羽部義孝らによつて文書化されたのではないだろうか。あるいは羽部らの活動の中に痕跡を残したのではないだろうか。家畜改良学という外の世界と板垣家文書をつなぐような研究の展開が期待できる。

もしそうした経験的知識が科学的知識と接合することがあつたならば、両者はどのような関係にあつたのだろうか。滋賀県農会による肥育技術指導はいくつかの飼料給与例を提示することでなされたが、個々の肥育農家においては自給可能な飼料の種類・量および牛個体による飼料の嗜好などに合わせてかなり柔軟に取り入れられていた。肥育試験の経緯からしても経験的知識を重視する接合であつたとい

える。背景には、肥育は脂肪交雑という日本にきわめて特徴的な志向性を持っていること、また肥育の成否は牛を解体するまで分からず解体してしまえばやり直しは効かないため、どこまでが牛の資質によるものなのか、肥育技術によるものなのか確定しにくく、科学化が難しいことがあると考えられる。家畜改良については、改良の方向性は違えども西洋にも遺伝学に基づく体系があり、また改良法の良否は同じ親牛の産子を見ることで評価可能である。肥育と比べると科学的知識との出会いは違った形をとったのではないだろうか。さらには牛に関する知識・技術だけでなく、たとえば稲作技術における経験的知識と科学的知識のありよう（老農による技術改良・普及）など、さまざまな問題とつながる広がりをもっているだろう。

これらの論点は本書の課題から大きく外れるが、本書を出発点とし、牛と農村をめぐる議論が活発化することを期待する。

(1) 農林省畜産局編『畜産発達史 本篇』（中央公論事業出版、一九六六年）二九八―二九九頁。

(2) 同前二二三頁。

(3) 野間万里子「滋賀県における牛肥育の形成過程―戦前期、役肉兼用時代の肥育論理―」（『農業問題研究』一七八号、二〇一〇年）。

板垣貴志著『牛と農村の近代史―家畜預託慣行の研究―』（思文閣出版、二〇一三年二月刊、A5判、vi+二五二+iv頁、本体価格四、八〇〇円）

（のま まりこ・京都大学大学院農学研究科研究員）

